

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22402045

研究課題名（和文）

日仏ひきこもり比較共同研究

研究課題名（英文）

Japanese-French comparative study of "Hikikomori"

研究代表者

古橋 忠晃 (FURUHASHI TADAAKI)

名古屋大学・総合保健体育科学センター・助教

研究者番号：50402384

研究成果の概要（和文）：日本において、ひきこもりと呼ばれる状態にある青少年の数は1970年代から徐々に増加し、現在その数は日本中で80万～140万人とも言われている。フランスでは青年のひきこもりが近年出現してきたと言われている。さらにフランスでは日本由来のオタク文化やインターネット文化の隆盛も顕著である。これらの日仏の「ひきこもり」について両国の研究者チームで学際的に研究をおこなった。日本の青年のひきこもりが15例、フランスの青年のひきこもりが7例集められた。それらの症例について、家族背景、経済状況、社会文化的背景、個々の精神病理、精神症状の有無について精神医学的、社会学的、人類学的、哲学的、心理学的な観点で検討した。また、事例を離れて、「ひきこもり」そのものの現象について、両国のそれぞれの観点で、社会学的、人類学的、精神医学的、哲学的観点で考察を行った。

研究成果の概要（英文）：The number of young people called "Hikikomori" has been gradually increasing from 1970s in Japan, and it is said that the number of them, at present, is from 800,000 to 1.4 million. In France it is said that young people's Hikikomori has recently come into existence. In addition, in France Otaku culture and Internet culture derived from Japan have been in full flourish. As for these "Hikikomori" in France and Japan, a team of scholars of both countries has conducted researches. Fifteen examples of youths in Japan and 7 examples of youths in France have been collected. These symptoms were considered in terms of family backgrounds, economic situations, socio-cultural contexts, each psychopathological process, and for the with or without the symptoms they were considered in terms of psychiatric, sociological, anthropological, philosophical and psychological points of view. Also, as for the phenomena of "Hikikomori" itself apart from the cases, they examined from sociological, anthropological, psychiatric and philosophical standpoints with each angle of both countries.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2011年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2012年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：①ひきこもり ②日仏比較 ③精神医学 ④社会学 ⑤人類学

1. 研究開始当初の背景

日本において、ひきこもりと呼ばれる状態

にある青少年の数は 1970 年代から徐々に増加し、現在その数は日本中で 80 万～140 万人とも言われている。精神科医である研究代表者（古橋）は、名古屋大学学生相談総合センターで学生の精神的相談に当たる業務に携わっている。2004 年度の段階で「長期不登校者」が全学部で 100 人以上を超えていた。

その中で、名古屋大学学生相談総合センターのスタッフ（古橋、津田、鈴木他）は、2008 年 3 月、フランスの学生相談の現場を訪れた。滞在の目的はフランスの学生相談のシステムの理解、フランスの大学生の精神的・心理的問題を知ることであった。さらにパリで「ひきこもり」についてのシンポジウムを行い、パリ大学の学生相談担当者とのディスカッションをおこなった。そこで、フランスの大学生にも、インターネット依存で自宅にこもってゲームばかりしている人がここ数年見られるようになっていて、こうした学生も果たして「ひきこもり」なのか、という話題がでた。ひきこもりは、日本に特有の現象であると言われてきたが必ずしもそうではない可能性がでてきたのである。この事実について、両国の社会文化的相違を把握して議論する必要があるだろうと結論になり、Pierre-Henri Castel 氏（パリデカルト大学）を中心として、その後「日仏ひきこもり共同研究プロジェクト」を立ち上げることになった。当初は日仏の 15 名程度の研究者（精神医学、教育学、心理学、哲学、歴史学、社会学、医療人類学など）が本プロジェクトに参加していた。

2. 研究の目的

1) 本研究は単純な原因論に傾くのではなく、ひきこもりが、いかに社会、文化、医療と関係しながら「現象」として立ち現れるのかということを書き記述する。

2) 学生相談という臨床・フリースクール、自助グループなどの場において、ひきこもりという「現象」を把握する。

3) フランスでは青年のひきこもりが近年出現してきたと言われている。彼らもやはり Hikikomori と呼ばれている。さらにフランスでは日本由来のオタク文化やインターネット文化の隆盛も顕著である。フランスの青年のひきこもりと少なくとも 20 年前から存在していたとされる日本のひきこもりと比較研究する。

4) フランスと日本における、ひきこもり現象の社会文化的背景について理解する。

5) フランスと日本における、ひきこもり青年の心理的背景の相違点・共通点について把握する

3. 研究の方法

まず、計画の段階で、以下の流れで研究を

進める予定であった。

3-1) 研究準備の開催（平成 22 年度）

それぞれの研究グループから「ひきこもり」と考えたケース、つまり、日本からは 5 名パリからは 4 名、合計 9 名が集められた。「ひきこもり」という診断を受けた事例を扱っているのではない理由は、本研究の目的は、日仏でそれぞれ「どのような人が『ひきこもり』と言われているのか」を検討するためである。こうして、研究メンバー全員で、パリデカルト大学にて 2010 年 9 月にこれらの全事例について詳細な検討を行った。なお、本研究は、名古屋大学総合保健体育科学センターにおける「ヒトを対象とする研究審査」の承認を受け、さらに調査先のパリの各施設でも個別に倫理委員会で承認を受けている。

3-2) 日本とパリの青少年のひきこもりについての実態調査（平成 23 年度）

我々はひきこもりの日仏共通定義を以下のように定めた。

「14 歳から 25 歳の間に以下のような状態が見られること

- a) 自宅で一日のうちの大部分を過ごしている
- b) 通常意義があるとされるあらゆる社会参加（勉強、仕事、人間関係）を避ける
- c) 少なくとも 3 ヶ月以上このような状態である
- d) 親しい友達がいなく、会っていない
- e) 身体的な問題がなく、明らかに統合失調症であるような病理を持たない

さらに、日仏共通の調査票を作成した。まずは、「ひきこもり」に関わる支援者や治療者などに「ひきこもり」という概念をどこで知ったのか、「ひきこもり」と様々な社会的因子との関係性についての意見をアンケート形式で聴取した。

さらに、本人に関わっている治療者から聞き取る「ひきこもり」の状態を把握する質問項目を、これに加えて、本人による日記、家族による本人についての日記、本人による自由記述課題（描画、コラージュなど）、本人による家族についての自由記述課題などが含まれる。さらに各治療者は本人に MINI（精神疾患簡易構造化面接法；International Neuropsychiatric Interview）を行った。

3-3) 日仏のデータの比較（平成 23 年度）。

前述した定義に従って、主として大学生の日本のひきこもりが 15 例、大学生を含む青年のフランスのひきこもりが 7 例集められた。それらの症例について、家族背景、経済状況、社会文化的背景、個々の精神病理、精神症状の有無について検討した。

3-4) 以上の研究方法による研究成果を名古屋（日本）やパリ（フランス）での共同シンポジウムを開催して発表した（平成 24 年度）。本シンポジウムには研究者のみならず

学生や一般の参加者にも門戸を開き本研究で得られた成果を広く社会に還元した。

4. 研究成果

4-1) 研究準備の開催の段階の成果としては、以下のような個人と社会を媒介するものが、日仏での「ひきこもり」の差異とどのように関わっているのかということについて、日仏で共通のアンケート調査を行っていく必要性を確認した。

- ・家族のあり方について。
- ・学校の競争について
- ・人々の苦しみを引き受ける医療-社会制度について
- ・日仏の両文化において（「孤独」や「孤立」に特有な意味合いを帯びさせていることについて）

4-2) 日本とパリの青少年のひきこもりについての実態調査の成果としては以下の通りである。日本の「ひきこもり」との差異としては、まずは、フランスの「ひきこもり」にはその「契機」として、心理的挫折（バカロレアの失敗、恋愛の失敗、性体験の失敗）を窺わせることである。いったんひきこもってしまうと、社会から大きく逸脱（薬物、非行など）する形でひきこもっていた。我々は、これを《trouble concret》タイプ（ひきこもりの前に具体的で客観的で明確な「契機」が存在していた）と呼んでいる。それゆえに、逸脱のあり方によって、例えば当人が薬物依存になっているのであれば、地域のセクターで対応するか、そういう問題として医療と接点を持つことになるのである。このことの詳細については、雑誌論文（2）で論じられている。

これに対して、日本の「ひきこもり」は、フランスの「ひきこもり」のように明確な挫折により「道を外す」という形ではなく、むしろ、こうした逸脱となりうるものを避けつつ、ひきこもっているように見える。だが、ここで重要なのは、本当に「避けている」のかどうかではなく、「避けている」ように見えるのは何故かという問いだろう。さらに、日本の「ひきこもり」は「あのようにしていたら、今頃あんなっていたのに」と考えているようである。つまり、「今頃あんなっていたのに」のようなものを心的構造の中に保持し続けている人が多いように思われた。このあたりは、フランスの「ひきこもり」と比較してこそ浮かび上がってくる特徴であると考えられた。

「精神疾患簡易構造化面接法 (The Mini-International Neuropsychiatric Interview; M. I. N. I.)」による精神医学的診断としては、フランスの「ひきこもり」は、「診断なし」や「社交恐怖」「広場恐怖」などが見られた。また、インターネットの長時

間使用をしているタイプが多い。本人の中では geek と自らを呼ぶことによってそうした「現在の自分」を肯定的に捉えているようである。つまり、フランスの「ひきこもり」は「あんなっていたのに」というものとの二重性を持っているというよりは、むしろ「現在の自分」を底上げしているようである。実際にフランスの「ひきこもり」にインタビューを試みたところ、「自分は geek だから何の問題もない」と話していた。geek という言葉はコンピューターマニアのようなものとして自身を肯定する言葉である。そのように自らを肯定しながら、実際はインターネットから抜け出せなくなっているようである。しかも、こうしたフランスと日本の「ひきこもり」のあり方の差異は、「ひきこもり」となった「きっかけ」の差異と通底している印象を受けた。また、社会的予後としては、ひきこもりを抜け出したという症例は少なく、この点は、日本の事例と同様であった。このことの詳細については、雑誌論文（6）で論じられている。

4-3) 日仏のデータの比較を要約すると、フランスの「ひきこもり」にはその背景として、不全感（バカロレアの失敗、恋愛の失敗、性体験の失敗、失業）を窺わせる症例が殆どであったとすることができる。いずれも未来に対する期待の「躓き」であると言える。そこには心的混乱の自覚も生じていたようである。さらに、一旦、ひきこもってしまうと、薬物やアルコールなどによる自身の「快」が後押しをして、その後、より一層ドロップアウトの状態を強めながらひきこもっていた。さて、ここで、不全感とは、果たして個人に還元できる病理なのだろうか、あるいは社会の病理なのだろうか、それとも個人と社会の関係性の病理なのだろうか、という問題が生じてきた。このことの詳細については、雑誌論文（3）で論じられている。

4-4) 研究開始後二年目において、日本側のメンバーがそれぞれの専門分野の観点から、日本精神神経学会第 107 回大会で発表し、それを、論文化した。清水（研究協力者）は堀口（連携研究者）と共に、本研究から見てきた日本における公的支援、民間支援の現状について触れ、そこから様々な問題提起をした。このことは、雑誌論文（9）で詳細に論じられている。さらに、鈴木（連携協力者）はフランスを超えてさらに広くヨーロッパのひきこもりについて、社会の「外部」との関係で論じ、ひきこもりにおける二重のパラドックスについて論じた。このことは、雑誌論文（7）で詳細に論じられている。また、照山（研究協力者）は、アメリカから見た日本の「ひきこもり」について論じ、さらにミシガン州における「ひきこもり」支援に活用

できるリソースの多様さについて紹介した。それがあまりに多様で網羅的であることから、アメリカでは「ひきこもり」としての事例化が起きないのは何故かという問いの一つの答が示されたと言えるだろう。

最終年度において、日本側のメンバーはそれぞれの専門領域の観点から、日本精神神経学会第108回大会で発表し、それを論文化した。照山(研究協力者)は堀口(連携研究者)と共に、文化人類学的視点から、発達障害者のコミュニティと「ひきこもり」のコミュニティとのコントラストを描き出すことによって、日本の「ひきこもり」そのものの持っている本質に迫る考察をおこなった。このことの詳細については、学会発表の(8)で論じられている。また、津田(研究分担者)は精神病理学的観点から、ひきこもりを「公共の縁における実存」との関連で論じ、ここからひきこもりへの理解と対策についての示唆を導き出した。このことの詳細については、学会発表の(5)で論じられている。さらに、小川(研究分担者)は精神分析的観点からひきこもりが慢性化する要因がどこにあるのかを追究し、さらに臨床的に幾つかのタイプ分けが可能であると述べた。このことの詳細については、雑誌論文(4)で論じられている。

以上の研究方法による研究成果を名古屋(日本)やパリ(フランス)のシンポジウムでそれぞれの研究メンバーが発表した。研究代表者の古橋は現代における神経症の変化と日仏のそれぞれのひきこもりのあり方の違いについて論じた。このことの詳細については、学会発表の(1)と(6)で論じた。また、パリデカルト大学のMaia Fansten(連携研究者)は同じくパリデカルト大学のCristina Figueiredo(連携研究者)と共に、人類学的、社会学的分析によって、成年への移行やその様式は「敷居をまたぐ」ときに構成されるという論理から、退却(ひきこもり)という現象の論理が、その移行の経過の中で、一つの文化的な意味を持つ表現形式として現れると述べ、ひきこもりを通して、時間と空間、家族の内外の関係、現実社会での身体の場所と感情の場所との諸関係についての問いについて問題提起をおこなった。さらに、フランス国立科学研究センターCNRSの主任研究員でパリデカルト大学のPierre-Henri Castel(連携研究者)は、「自律」という概念が本来持っているポジティブないくつかの特徴を明らかにすることで、「社会的ひきこもり」の精神病理学化を特徴づけているネガティブな見地を逆転させる試みを行った。古代ギリシャの哲学者ディオゲネスの自給自足というあり方との関係を通して、現代の「ひきこもり」のあり方について刺激的な哲学的考察を行った。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計15件)

1. 堀口佐知子. 「ひきこもり」ラベルをめぐるダイナミクスと戦略: 「障害/非障害を超えて」. *こころの科学* 167:1-8, 2013. (査読なし)
2. Furuhashi T, Tsuda H, Ogawa T, Suzuki K, Shimizu M, Teruyama J, Horiguchi S, Shimizu K, Sedooka A, Figueiredo C, Pionnié-Dax N, Tajan N, Vellut N, Fansten M, Castel P.H. État des lieux, points communs et différences entre des jeunes adultes retirants sociaux en France et au Japon (Hikikomori). *L'évolution psychiatrique* 77(4): 印刷中, 2013. (査読あり)
3. 古橋忠晃, Pionnié-Dax N, Fansten M, Vellut N, Figueiredo C, Castel P.H. フランスの「ひきこもり」から見えてくる病理. *精神神経学雑誌* 114(10):1173-1179, 2012. (査読なし)
4. 小川豊昭. 一次性引きこもりの精神分析: ナルシシズムとパッシブ・アグレッション. *精神神経学雑誌* 114(10):1149-1157, 2012. (査読なし)
5. 津田均. 公共の縁としての実存-ひきこもりの理解のために. *精神神経学雑誌* 114(10): 1158-1166, 2012. (査読なし)
6. 古橋忠晃, Figueiredo C, Pionnié-Dax N, Vellut N, Fansten M, Castel P.H. フランスの「ひきこもり」と医療制度について. *日本精神神経学会学術総会特別号*. 第107回(2011年):SS2-SS9, 2012. (査読なし)
7. 鈴木國文. 日本のひきこもり、ヨーロッパのひきこもり-フランスとイタリアの現状に触れて. *日本精神神経学会学術総会特別号*. 第107回(2011年):SS10-SS15, 2012. (査読なし)
8. 照山絢子, 堀口佐知子. 発達障害者と「ひきこもり」当事者コミュニティの比較: 文化人類学的視点から. *精神神経学雑誌* 114(10):1167-1172, 2012. (査読なし)
9. 清水克修, 堀口佐知子. 日本の「ひきこもり」支援の動向と課題をさぐる: 「ひきこもり」当事者のナラティブを参考に. *日本精神神経学会学術総会特別号*. 第107回(2011年):SS16-SS22, 2012. (査読なし)
10. 堀口佐知子. 世界に広がる「ひきこもり」現象. *精神科治療学* 27(4):483-488, 2012. (査読なし)
11. 古橋忠晃, 津田均, 小川豊昭, 鈴木國文, 清水美佐子, 北中淳子, 照山絢子, 堀口佐知子, 清水克修, 後岡亜由子, Figueiredo C,

Pionné-Dax N, Tajan N, Vellut N, Singly F, Pierrot A, Castel P.H. 「ひきこもり」青年の日仏における共通点と相違点について. 総合保健体育科学(名古屋大学総合保健体育科学センター) 34:29-33, 2011. (査読あり)

12. 古橋忠晃. 境界例という概念はどこにいったのか-思春期の病理を通して-. 精神科治療学 26:711-718, 2011. (査読なし)

13. 古橋忠晃. インターネット依存, 携帯依存, 買い物依存は「依存」なのか? 精神科治療学 25:621-627, 2010. (査読なし)

14. 鈴木國文. 精神科医療における「言語」の問題-自立支援法の時代に. 日本社会精神医学会 18(3):357-362, 2010. (査読なし)

15. Suwa M, Suzuki, K. The Phenomenon of "Hikikomori" (Social Withdrawal) and the Socio-cultural Situation in Japan Today. Il fenomeno del ritiro sociale "hikikomori" e la situazione socio-culturale in Giappone oggi Journal of Psychopathology 19: 印刷中 2013. (査読あり)

[学会発表] (計 24 件)

1. Furuhashi T. Structure psychique des Hikikomori en France et au Japon. Jeunes en retrait ou hikikomori: expériences croisées France/Japon. (2013.3.21 パリ, フランス)

2. Ogawa T. Psychanalyse du retrait social ou Hikikomori : Narcissisme pathologique et agressivité passive dus à une défaillance de contenant- contenu subie durant l'enfance. Jeunes en retrait ou hikikomori: expériences croisées France/Japon. (2013.3.21 パリ, フランス)

3. Suzuki K. Hikikomori, nos contemporains. Jeunes en retrait ou hikikomori: expériences croisées France / Japon. (2013.3.20 パリ, フランス)

4. Teruyama J, Horiguchi S. On Two Ends of Minority Politics: An Anthropological Analysis of Hattatsu Shôgai (Developmental Disability) and Hikikomori Communities. Jeunes en retrait ou hikikomori: expériences croisées France /Japon. (2013.3.20 パリ, フランス)

5. Ogawa T. Psychanalyse du retrait social (Hikikomori): Narcissisme pathologique et agression passive dus à une défaillance de contenant-contenu subie durant l'enfance. Symposium Franco-Japonais à l'Université de Nagoya sur le Hikikomori (2013.1.9 名古屋)

6. Furuhashi T. Structure psychique des

Hikikomori en France et au Japon. Symposium Franco-Japonais à l'Université de Nagoya sur le Hikikomori (2013.1.9 名古屋)

7. (招待講演) 堀口佐知子. Medicalization of Youth Social Withdrawal: Anthropological Perspectives on Hikikomori in Japan. Health Cultures and Tribal Communities: Emerging Research Agenda and Policy Shifts (2013.1.3 ハイデラバード, インド)

8. Horiguchi S. Making Sense of Youth at the Margins of Society: Hikikomori and Disability. Anthropology of Japan in Japan (2012.12.2 京都)

9. 堀口佐知子. 「ひきこもり」に対する居場所支援・精神医療のありかたに関する人類的考察. 日本カウンセリング学会 シンポジウム 不登校・ひきこもり研究・支援の最前線. (2012.10.27 千葉)

10. 古橋忠晃. 「享楽」との関係で見た現代の神経症的な「ひきこもり」のあり方について (ワークショップ「ひきこもり」). 第 35 回日本精神病理・精神療法学会 (2012.10.5 福岡)

11. 堀口佐知子. グレーゾーンにある若者・大人の「ひきこもり」: 自立から共生へ. 東京大学大学院総合文化研究科/教養学部付属共生のための国際哲学研究センター (UTCP)・上廣共生哲学寄付研究部門「共生のための障害の哲学」プロジェクト 共生のための障害の哲学 第 4 回研究会 「グレーゾーンの子供/大人たち: 発達障害とひきこもり」 (2012.9.6 東京)

12. Furuhashi T. Hikikomori en France et au Japon. Le Pôle de Psychiatrie et de Santé Mentale et le C.A.M.U.S. (2012.7.5 ストラスブール, フランス)

13. Horiguchi S. Medicalization of Youth Social Withdrawal?: Anthropological Perspectives into Hikikomori in Japan. East Asian Anthropological Association (2012.7.7 香港)

14. (招待講演) 古橋忠晃, 堀口佐知子. 引きこもり-日仏のパーспекティヴ. 国際シンポジウム「精神病理からみる現代-うつ、ひきこもり、PTSD、発達障害」(2012.6.30 京都)

15. (招待講演) 古橋忠晃. 「ひきこもり」の臨床について. 「子ども・若者支援地域ネットワーク形成のための研修会事業」第 2 回「困難を抱える若者のための精神保健福祉支援・就労支援の実際」講習会 (2011.10.29 愛知)

16. 古橋忠晃, 鈴木國文. 普通倒錯 (Perversion ordinaire) について. 第 34 回日本精神病理・精神療法学会 (2011.10.14 名

古屋)

17. Horiguchi S. Hikikomori (social withdrawal) and the "crises" of family and society in contemporary Japan. European Association for Japanese Studies (2011.8.27 タリン, エストニア)

18. 古橋忠晃, 津田均, 小川豊昭, 鈴木國文, 清水美佐子, 北中淳子, 照山絢子, 堀口佐知子, 清水克修, 後岡亜由子, Cristina Figueiredo, Nancy Pionné-Dax, Nicolas Tajan, Natacha Vellut, François de Singly, Alain Pierrot, Pierre-Henri Castel. 日仏ひきこもり比較共同研究. 海外学術調査フォーラム (2011.6.25 東京)

19. Furuhashi T. Centre général de conseil aux étudiants à l'Université de Nagoya et retirants sociaux. Amphithéâtre de la Clinique Psychiatrique, Faculté de Médecine, Université de Strasbourg (2011.6.7 ストラスブール, フランス)

20. Horiguchi S. The treatment of hikikomori in psychiatry: perspectives from tōjisha, lay supporters, and psychiatrists. Association for Asian Studies/International Convention of Asia Scholars Joint Conference (2011.3.31 ホノルル, ハワイ)

21. 古橋忠晃, 津田均, 小川豊昭, 鈴木國文, 清水美佐子, 北中淳子, 照山絢子, 堀口佐知子, 清水克修, 後岡亜由子, Cristina Figueiredo, Nancy Pionné-Dax, Nicolas Tajan, Natacha Vellut, François de Singly, Alain Pierrot, Pierre-Henri Castel. ひきこもり青年(大学生)の日仏における共通点と相違点について. 第48回全国大学保健管理集会 (2010.10.10.22 千葉)

22. Furuhashi T. Le « Hikikomori (retrait social) » au Japon. Centre Binet à la Salpêtrière(Colloque) (2010.9.23 パリ, フランス)

23. Horiguchi S. Hikikomori and engagement with information and communicate technologies: Are hikikomori really only living in 'virtual reality'? Society for Social Studies of Science (4S) Annual Meeting (2010. 8.28 東京)

24. 堀口佐知子. 心と社会を媒介する身体: 「ひきこもり」からの洞察. 日本文化人類学会第44回研究大会(2010. 6.13 埼玉)

[図書] (計3件)

1. 古橋忠晃. 「買い物依存、インターネット

ト依存、携帯電話依存」. 専門医のための精神科臨床リュミエール・26 「依存症・衝動制御障害の治療」 中山書店 2011. p192-199.

2. Horiguchi S. Hikikomori: How Private Isolation Caught the Public Eye. In: A Sociology of Japanese Youth: From Returnees to NEETs. Routledge 2011. p122-138.

3. Horiguchi S. Coping with hikikomori: Socially withdrawn youth and the Japanese family. In: Home and Family in Japan: continuity and transformation. Routledge 2011. p216-235.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古橋 忠晃 (名古屋大学総合保健体育科学センター・助教)

研究者番号 : 50402384

(2) 研究分担者

津田 均 (名古屋大学総合保健体育科学センター・准教授)

研究者番号 : 00302745

小川 豊昭 (名古屋大学総合保健体育科学センター・教授)

研究者番号 : 20194441

(3) 連携研究者

鈴木 國文 (名古屋大学医学部・教授)

研究者番号 : 80115485

北中 淳子 (慶應義塾大学文学部・准教授)

研究者番号 : 20383945

堀口 佐知子 (東京外国語大学外国語学部・研究員)

研究者番号 : 30514541